

〔研究ノート〕

柿本宮曼荼羅図の制作をめぐる ―「南都絵師」の作例―

大和文華館に所蔵される「柿本宮曼荼羅図」(以下、本図と略称。図1)は、神社の社頭景観を描く宮曼荼羅の中でも古例であり、本誌誌上でも度々紹介されてきました。描かれた舞台は、天理市樺本に位置する和爾下神社です。一帯は歌聖として神格化された柿本人麻呂と縁のある地域とされ、本図にも人麻呂の墓とされる「歌塚」や「柿本寺」寺址が描き込まれています。画面下部の右手に描かれた高瀬川とこれらの旧跡、及び社殿や東大寺山の配置は、現在とほとんど変わることがないことに驚かされます。実際の景観を踏まえた上で描かれたことは明らかです。

参道の両側を満開の桜が咲き誇る自然景観や霞の構成からは、本図が春日宮曼荼羅の構図を借りて描かれたことが分かります。春日宮曼荼羅は「三笠山并南円堂形像」(『維摩会并東寺灌頂記』)、「図絵春日御社」(『玉葉』)などの表現で史料上確認することが出来、十二世紀後半に成立したと考えられています。鎌倉時代以降、その制作はかなり流行したようで、花園天皇が記した日記である『花

園天皇宸記』には、「春日曼荼羅(図画社頭之気色、以是号曼荼羅、近年每人所持物也)」(正中二年[1325]十二月二十五日条)と記されます。こうした春日宮曼荼羅の盛行は、周辺に位置する他の社寺の視覚化を促したと考えられます。本図の他に、当館には笠置曼荼羅図や日吉曼荼羅図が所蔵されます。

ところで、本図と表現技法上、多くの共通性が見出される作例に、大阪・湯木美術館に所蔵される「春日宮曼荼羅図」(以下、湯木本と略称。図2)が挙げられます。湯木本は、正安二年(1300)十月に、絵師観舞法橋によって描かれたことが分かる基準作です。その制作には、亀山法皇や藤原宗親が関わったことも分かり、本図の制作年代や背景を考察する上で鍵となる重要な作例です。絵師観舞については、興福寺や春日大社における絵画需要を満たしていた、南都絵所芝座に属していた絵師であることが明らかにされています。

治承四年(1180)の平重衡による南都焼き討ちは、東大寺や興福寺に甚大な被害をもたらしまし

たが、翌年より始まった復興活動は、仏像や仏画をはじめとした造像活動を活発化させ、多くの仏師や絵師が南都に下向しました。中にはそのまま南都に残り、寺社の絵画需要に応じていった絵師も見られます。興福寺の院家である大乗院に所属し、吐田座の祖とされる有尊もその一人です。彼は巨勢金岡の系譜を引く絵師でした。

観舞の属していた芝座ですが、鎌倉時代におけるその実態は残念ながらよく分かっていません。弘安・正応年間の春日大社・興福寺の造像活動に関与したことが記録から伺える「観実」がわずかに知られるのみです。ちなみに、弘安十年(1287)十一月一日の記録には、「師子等ハ南都絵師慶実也別一二殿朱塗者也／御鳥居ハ京都絵師道詮三四殿朱塗者也」(『春日社造替記』)とあり、南都在住の絵師という意味で「南都絵師」の語が用いられていたことが伺えます。南北朝期に入ると、貞和四年(1348)に四恩院画巻を描いたとされる「観慶」、永和三年(1377)に制作された、東大寺に現存する「四聖御影」を描いた「観盛」の事績が挙げられます。湯木本の存在は、史料に散見される南都絵師の画業を今に伝える、数少ない遺例の一つとして大変重要です。

湯木本とその表現が類似する作例として、奈良国立博物館に所蔵される「春日社寺曼荼羅」(以下、奈良博本と略称。図3)が挙げられます。春日大社の神域及び、興福寺の伽藍を一図に収めたものです。画面中央部に描かれた、春日社の東西両塔、本殿や若宮社の社殿描写、境内に咲く桜の描法に共通する特徴が見て取れます。特筆すべきは雲母の使用です。金泥によって

参道が装飾される一方で、興福寺伽藍内の地面には雲母の使用が認められます。

本図においても、画面上部に描かれた、回廊内部の社殿周辺、及び下部に表された御旅所前の地面に、雲母による装飾が認められます。参道に金泥が用いられるのも同様です。金や銀とは異なる雲母特有の表現効果を狙ったものであり、本図と奈良博本との間には、加飾感覚の共通性を見出すことが出来るでしょう。

本図の画面構図を考察する上で必ず比較されるのが、「生駒宮曼荼羅図」(奈良国立博物館蔵)です(図4)。正面観の強い社殿や、摂末社の配置に共通性が認められます。

以上のように、ここに挙げた諸作例は、本図の制作年代や制作背景を明らかにする上で不可欠な存在であると考えます。とりわけ、湯木本や奈良博本との類似は、本図の制作が十四世紀前半頃であることを示すとともに、南都絵師によって描かれたと見なされる証左となるといえます。

最後に、本図の制作背景について想像を膨らませてみます。湯木本と同様に、本図も数ある宮曼荼羅の中ではかなり画格が高いと言えます。ところが、描かれた場所は当時既に荒廃していたと思われます。鴨長明が著した『無明抄』には次のように記されます。「人丸の墓は大和国に有り。初瀬へ参る道なり。人丸の墓といひて尋ねるには、知れる人もなし。彼の所には歌塚とぞいふなる。」一帯が柿本人麻呂に縁ある土地柄であるために、絵画化される必要性があったと考えられます。当時の宮中では、大覚寺統と持明院統が皇統を争っていました。その余波は貴族達の様々な習俗にまで及んだと思われます。こうした状況下で、柿本人麻呂に権威の拠り所を必要とした貴族の存在が、本図の制作に関与したのではないのでしょうか。(古川攝一)

※図2は、『興福寺国宝展』図録、朝日新聞社、2004年、図3は『おん祭と春日信仰の美術』図録、奈良国立博物館、2009年、図4は『神仏習合』図録、奈良国立博物館、2007年より複写させて頂きました。

図1



図2



図3



図4



季刊 美のたより No.173

平成23年1月6日

発行 大和文華館